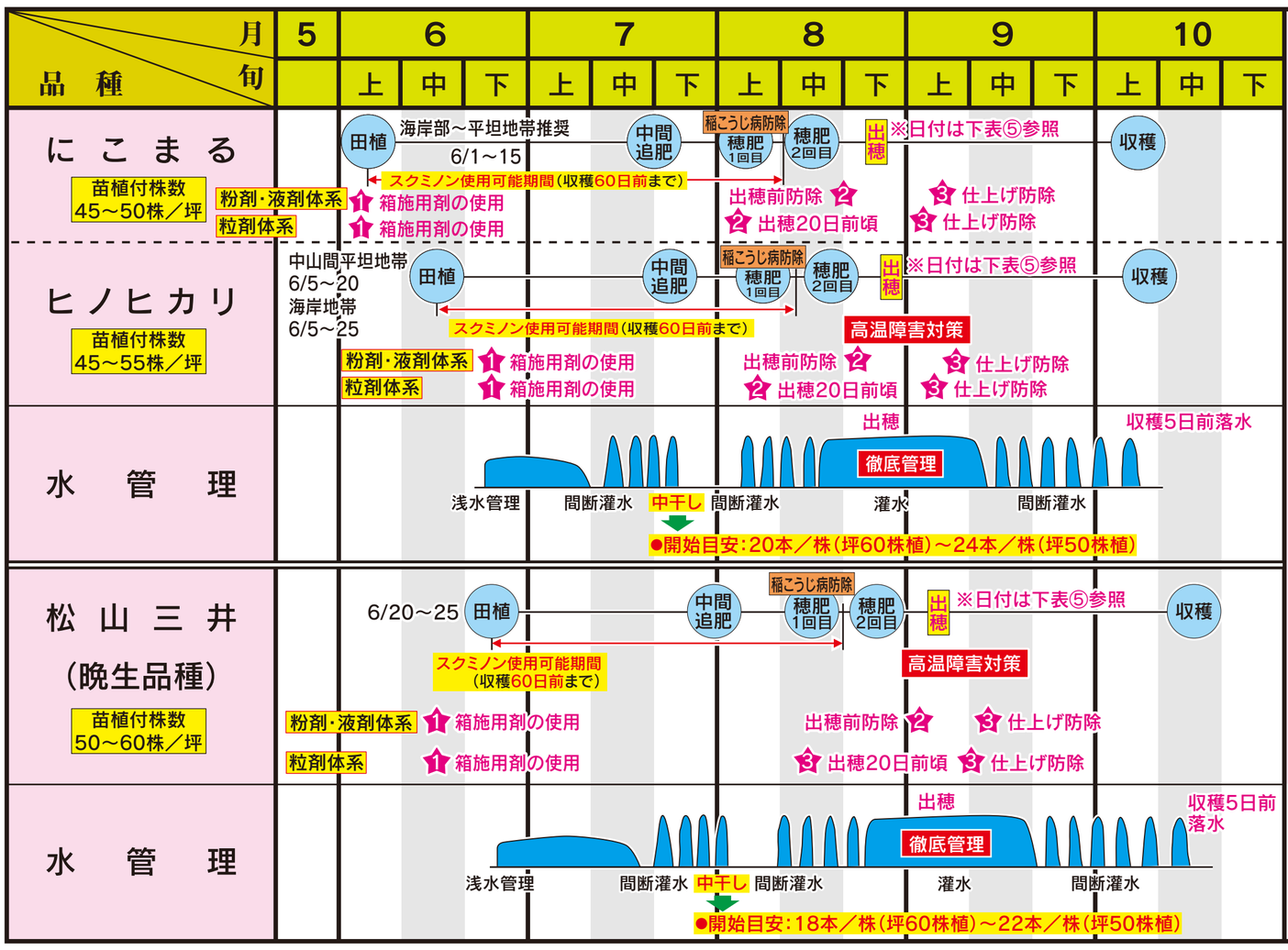
令和8年度 普通期稲作ごよみ

周桑農業協同組合
周桑広域作物部会

売れる・うまい米づくりを実践しよう!!

米は全量農協へ!!

カントリーエレベーターと育苗センターを有効利用して、コスト低減と、品質の高位平準化を図ろう!



米品質向上対策

対策1 土づくりによる強い稲体づくり
- ●稲わらの腐熟促進・土壌改良促進のため、土壌改良剤の施用と併せ「秋耕こし」を実施しましょう。
- ●作土が浅いと根が上部に集中し、高温や異常気象に対応できない。今より3cm深い深耕。（堆肥や新美土里の散布と併せ、ゆっくり深く耕起）

対策2 品種特性と地域に合わせた田植え時期の適正化で品質アップ
- ●にこまるは6月1～15日まで、ヒノヒカリは6月10～25日に田植え。

対策3 植付株数を少なくし、過剰分げつの抑制で適正な穂数を確保
- ●植付け適正株数は坪当たり50株を基本とする。必要苗箱数16～18枚／10a
- ●目標茎数が確保できれば中干しを開始する。強い中干しは根を切るため軽い地割れ程度で行い、灌水の再開は浅水で軽めから始める。
  ※但し、田植後45～50日経過すると幼穂形成期となるため、これ以降は水が最も必要な時期となる。よって田植後50日以降の中干しは品質の低下に繋がるため実施しない。
- ●麦作あとに栽培する場合は、ワラ分解の影響を低減するため基肥を増やす。

対策4 置き苗の早期除去
- ●いもち病の発生源となるので、田植え後は速やかに除去する。

対策5 中間追肥施用による根張り・茎数確保と強い稲体づくり
- ●出穂40～30日前（田植え後30日頃）に施用して、天候の変化や病害虫に強い稲体をつくる。良食味米生産に中間追肥施用の影響は大きく、欠かせない。

対策6 高温時や天候不順時の水管理を徹底して活力維持
- ●登熟期の間断灌水や夜間水のかけ流しによる根の健全化に努める。入水は日中を過ぎてから開始し、夜間の水田温度を下げ、稲を休ませて活力を保つ。
- ●登熟期の土壌乾燥は品質を著しく低下させるため、乾かさないように水を引く。
- ●長い日数の深水状態や湛水は土壌を酸欠にするため、間断灌水を徹底し、一定時間は田面を出して土壌中に多く酸素が入るよう管理する。
- ●落水の時期は刈り取り5日前とする。

対策7 病害虫の本田適期防除による健全栽培
- ●出穂期防除は出穂前まで、傾穂期防除は10日後を目安に行い確実に防除する。
- ●カメムシ対策として、本田2回防除と併せて出穂15日前の周辺雑草の草刈を行う。

◎農薬散布にあたっては近隣に一声かけるとともに、周辺作物への飛散には注意しましょう。

病害虫防除基準

◎箱施用剤

時期	対象病害虫	使用薬剤名	10a当たり使用量・倍率	使用時期・備考
播種時（覆土前） ～当日 1	いもち病・紋枯病・もみ枯れ細菌病・白葉枯病・内穎褐変病・穂枯れ・疑似紋枯病・ウンカ類・ツマグロヨコバイ・コブノメイガ・フタオビコヤガ・イネツトムシ・イネドロオイムシ・イネミズゾウムシ・ニカメイチュウ	スクラム箱粒剤 ※JA育苗Cの苗を使用する場合は使用しない	一箱あたり50g	施用した後は軽く散水し、田植まで乾かさない。

Ⓐ粉剤体系

時期	対象病害虫	使用薬剤名	10a当たり使用量・倍率	使用時期・備考	応急防除（10a当たり使用量）
出穂20～10日前	稲こうじ病	Zボルドー粉剤DL	3～4kg	遅れると効果ない	○ツマグロヨコバイ・ウンカ類・食用性害虫：トレボン粉剤DL（4kg） ○穂いもち：ブラシン粉剤DL（4kg） ○アブラムシ・イナゴ類：発生した場合は指導員に相談
出穂前防除 2	いもち病・紋枯病 ツマグロヨコバイ・ウンカ類 食葉性害虫・カメムシ類	ワイドナーエース粉剤DL	4kg	出穂前の夕方に株元にかかるように散布。	
傾穂期防除（選択） 3	カメムシ類 ツマグロヨコバイ・ウンカ類	スタークル粉剤DL	3kg	穂が傾いたころ、出穂後10～14日後（収穫7日前まで）	
	いもち病・カメムシ類 ツマグロヨコバイ・ウンカ類	ビームスタークル粉剤5DL	4kg		

Ⓑ液剤体系

時期	対象病害虫	使用薬剤名	10a当たり使用量・倍率	使用時期・備考	応急防除（10a当たり使用量）
出穂20～10日前	稲こうじ病・墨黒穂病	ドイツボルドーA	2,000倍 100～150ℓ	遅れると効果ない	
出穂前防除 2	イネツトムシ・コブノメイガ・ニカメイチュウ・フタオビコヤガ	ディアナSC	4,000倍～6,000倍	出穂前の夕方に株元にかかるように散布。	○葉いもち：ダブルカットフロアブル 1,000倍（100ℓ） ○紋枯病：バリダシン液剤5 1,000倍（100ℓ） ○食葉性害虫：パダンSG水溶剤 1,500倍（100ℓ） ○ツマグロヨコバイ・ウンカ類：トレボン乳剤 1,000倍（100ℓ） ○穂いもち：ブラシンフロアブル 1,000倍（100ℓ） ○アブラムシ・イナゴ類：発生した場合は指導員に相談
	ウンカ類・カメムシ類・ツマグロヨコバイ	＋ スタークル液剤10	1,000倍 100～150ℓ		
	いもち病・紋枯病	＋ ダブルカットバリダフロアブル	1,000倍		
傾穂期防除（選択） 3	カメムシ類 ツマグロヨコバイ・ウンカ類	スタークル液剤10	1,000倍 100～150ℓ	穂が傾いたころ、出穂後10～14日後（収穫7日前まで）	
	いもち病・カメムシ類 ツマグロヨコバイ・ウンカ類	ビームエイトスタークルゾル	1,000倍 100～150ℓ		

Ⓒ粒剤体系

時期	対象病害虫	使用薬剤名	10a当たり使用量・倍率	使用時期・備考	応急防除（10a当たり使用量）
出穂3～2週間前	稲こうじ病・紋枯病・疑似紋枯病	モンガリット粒剤	3～4kg	遅れると効果ない	
出穂20日前頃 2	いもち病・紋枯病・稲こうじ病 籾枯細菌病・穂枯れ・ウンカ類 ツマグロヨコバイ・カメムシ類	ゴウケツモンスター粒剤	3kg	総合防除をする場合は出穂10～5日前頃に湛水3～5cm状態で散布し、4～5日間は湛水を保つ。 稲こうじ病を防除をする場合は出穂21～14日前頃に散布する。（収穫45日前まで）	○いもち病：コラトップ粒剤5（4kg） コラトップジャンボP（500～650g） ○その他の応急防除は、粉剤又は液剤で行う。
	食葉性害虫	＋ パダン粒剤4	＋ 4kg		
仕上げ防除 3	カメムシ類 ツマグロヨコバイ・ウンカ類	スタークル粒剤	3kg	出穂5～8日後に湛水3cmで散布し、4～5日間は湛水を保つ。（収穫7日前まで）	
		スタークル豆つぶ	500g（カメムシだけの防除は250g）		

※本田防除については、上記Ⓐ～Ⓒのいずれかの防除体系で実施する。 ※他作物と隣接している圃場は、粒剤体系が風等による飛散を少なくすることができます。

雑草防除基準

一回処理 ※雑草の多い水田や難防除雑草の発生する水田は、田植え直後に散布し初中期剤や中後期剤との体系処理を行う。

時期	使用時期	雑草名・他	使用薬剤名	流込み	10a当たり使用量・倍率	備考
田植同時～初中期	移植時～ノビエ3葉期（田植同時散布機で使用可）	1年生雑草 多年生雑草	銀河α1キロ粒剤		1kg	田植同時処理後は速やかに入水し、3～5cmの湛水状態を保つ。（7日間以内は落水やかけ流しはしない）
	移植時～ノビエ2.5葉期（田植同時散布機で使用可）		ラオウ1キロ粒剤		1kg	
	移植時～ノビエ2.5葉期（田植同時散布機で使用可）		カチボシLフロアブル	水口可	500mℓ	散布時は、3～5cmの湛水状態を保つ。（7日間以内は落水やかけ流しはしない）
	移植直後～ノビエ3葉期		エンペラージャンボ		10パック（250g）	

○体系処理中後期剤 ※初期剤と初中期剤の体系処理で雑草を取りこぼした場合は中後期剤を処理する。

時期	雑草名	使用薬剤名	10a当たり使用量	使用時期（収穫前日数）	備考（使用の注意点）
中期	イネ科雑草 広葉雑草	トドメバスMF液剤	水70～100ℓに1,000mℓを溶かして散布	移植後15日～ノビエ6葉期（収獲50日前）	散布時は必ず落水し、散布後4日間は入水しない。高温時の使用、重複散布は避け、夕方散布する。散布後降雨があっても落水しない（展着剤なし）。
		レブラス1キロ粒剤	1kg	移植後14日～ノビエ4葉期（収穫60日前）	ホタルイが約20センチまで散布可能。藻類他浮草が発生している圃場では、使用を避ける。（レブラスジャンボ）
		レブラスジャンボ	10パック（400g）		
後期	広葉雑草	バサグラン粒剤	3kg	移植後15日～収穫45日前まで	落水してひたひた水で散布し、5日程度入水しない。散布後7日間は落水、かけ流しはしない。散布後3日程度降雨不可。※クサネム・イボクサ・コナギの多い場合は『ロイヤント乳剤』を使用する。ただし、ホタルイ・グログアイ・コウキヤガラには効果が劣るため注意する。
		バサグラン液剤	500～700mℓ		

①施肥設計基準（目標収量500kg）

（10a当り）

品種	土改材	基肥		中間追肥	流込み追肥	穂肥
	新美土里	マップ202	化成肥料444	PKミックス（苦土・ミネラル入）	ソイヤー（水口流込み）	マップ202又はNK化成7号
	12月～4月	田植え7日前～当日		出穂30～40日前	中干し後	出穂18日前
にこまる	54kg（3袋）	30kg		20～40kg	6kg（1袋）	30～35kg（※）
ヒノヒカリ	54kg（3袋）	30kg		20～40kg	※3日間湛水し、減水する場合は足し水	30kg（※）
松山三井	54kg（3袋）	30kg		20～40kg		30kg（※）

※穂肥は2回に分施し、2回目は出穂前10日頃とする（高温障害対策）。

②全量基肥一発施肥（ワンタッチ肥料）の施肥基準

（10a当り）

品種	新美土里	ユーコート602L	ユーコート202中晩生	PKミックス（苦土・ミネラル入）	ソイヤー（水口流込み）	備考
	12月～4月	田植え7日前～当日		出穂30～40日前	中干し後	
にこまる	54kg（3袋）	50～55kg	40kg	20～40kg	6kg（1袋）	側条施肥の場合は基準量から1割減とする。その年の天候により、肥効に差がでる。
ヒノヒカリ	54kg（3袋）	50～55kg	40kg	20～40kg	※3日間湛水し、減水する場合は足し水	
松山三井	54kg（3袋）	50～55kg	40kg	20～40kg		

※ワンタッチ肥料は比重が軽く、側条施肥田植機使用の場合は、比重0.9以下で施用量を調節する。
※一発肥料は、成分溶出後の殻が水に浮上することがあるため、圃場外に流出させないように留意してください。（浅水代かき、自然水、網の設置等）

③施肥注意事項

側条施肥の場合は、基肥を90%にする。

④倒状軽減剤使用基準

薬剤名	10a当り使用量	使用時期	備考	本剤の使用回数
スマレクト粒剤	2～3kg	出穂前7～20日	3～5cm湛水し、散布後3～4日間は湛水状態を保つ。	1回
ビビフル粉剤DL	4kg	出穂前5～10日	重複、多量散布はしない。	1回
ビビフルフロアブル	水50～150ℓに75～100mℓを溶かして散布	出穂前10～2日	重複、多量散布はしない。	1回

ビビフル粉剤DL・フロアブルは走り穂が見えたら散布時期です。

⑤出穂期の目安（出穂期：全茎の40%～50%が出穂した日）

にこまる・田植日	6/1	6/10
出穂期	8/20	8/23

ヒノヒカリ・田植日	6/15	6/25
出穂期	8/26	8/29

松山三井・田植日	6/20	6/30
出穂期	9/3	9/7

※気温の変動によってズレる可能性があります。

⑥刈取適期基準

項目	にこまる	ヒノヒカリ	松山三井
出穂後日数（日）	42～50	38～46	49～61
最長稈黄変籾率（%）	85～90	85	85～90
積算温度（℃）	1,000～1,150	950～1,150	1,050～1,200

※最長稈黄変籾率は、収穫始めの基準で、1株中の親穂の着色を確認し、5株程度を平均して判断する。

⑦乾燥・調製の注意事項

- ○胴割・乾燥むらを防ぐため、急激な乾燥をさけ、ゆっくり乾燥。
- ○送風温度は、循環式で40℃以下。玄米水分14.5%を目標。
- ○ライスグレーダーは1.85ミリ以上の網目を使用する。
- ○風袋含み出荷重量は30.5kg。

スクミリンゴガイの防除ポイント

- ◆水路からの発生を防ぐため、雑草除去や泥上げを実施
- ◆田植前には、金網やネット等を張り、貝の侵入を防ぐ
- ◆田植後20日間の浅水管理で被害が軽減できる
- ◆卵塊、貝は見つけ次第、捕殺する
- ◆水稲収穫後（厳冬期）の耕起を実施
- ◆冬季、水や泥がある水路の泥上げを実施

薬剤防除

使用時期	薬剤名	10a当たり使用量（使用回数）	備考
収穫後または田植前	石灰窒素	20～30kg	水稲収穫後に防除対象水田を3～4cmに湛水し、3～4日後に貝の水中での活動が確認できたら、石灰窒素を20～30kg/10a散布し、3～4日放置し殺貝する。その後、処理水を自然落水する
※水温15℃以上の時期に施用。処理水を外に流さないように注意する。（漏水、大雨時は施用しない。）※魚毒性が高いので、処理水は絶対に水路に流さない。			
移植後（収穫60日前まで）	スクミノン	1～4kg（2回）	処理後、水を止めて（水深3～5cm）7日間保つ。
※スクミリンゴガイを確認後、直ちに散布。全面均一処理が基本だが、水口周辺や深水になる場所は所定の範囲内で多めに散布する。水田以外では絶対に使用しない。			

注意事項：薬剤使用時にラベルを再確認し、使用してください。
特に石灰窒素を施用する際は、水路や他のほ場への流れ込みに注意してください。

★水稲栽培についてのご相談は、農協営農指導員、県普及指導員に!!

大阪中毒110番（毎日24時間・年中無休） 072－727－2499

被害防止のため、地域、水系ごとの対策を行う!